

タイトル:平成 28(2016)年度 研究セミナー(第 17 回)

日程:平成 28 年 12 月 16 日(金)～18 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

「私の博士論文」

荻谷 康太 (AA 研)

本報告では、前半で、自己紹介を兼ねた現在の研究内容の説明を行い、後半で、学部から修士課程、博士課程へと繋がった研究関心や、博士課程での研究生活の概要、そして、博士論文執筆とその後の作業に関する所感を述べた。以下では、特に「私の博士論文」という標題に直接関係する後半部分について記す。

報告ではまず、報告者の研究対象が学部生の頃から博士課程の学生になるまで基本的に大きく変わらなかった点を述べた。報告者は、学部生の頃にセネガル発祥のスーフィー教団であるムリッド教団とその開祖アフマド・バンバの思想に関心を抱くようになり、その後一貫して、この開祖が著したアラビア語著作群の内容を詳らかにすることを研究の軸としてきた。博士課程ではこうした研究関心の延長線上で、アフマド・バンバの著作群の分析を起点に、西アフリカから西アジアにまで広がるイスラーム知識人達の知的な連関の網の目を描き出そうと考え、それを博士論文の大きな目的の一つに据えた。

次に、博士課程における報告者の研究生活の概要へと話を進めた。報告者は、上記の目的のために、資料調査を主眼とした短期の現地調査と、現地調査によって獲得した資料の分析に基づく投稿論文の執筆を交互に繰り返しながら博士課程の期間を過ごした。そして、数本の論文を発表した後、それらの内容を踏まえながら博士論文の研究意義や構成などを固め、本格的に博士論文執筆の段階へと進んだ。

最後に、報告者が博士論文執筆中、そして博士論文提出後に感じたことを 2 点付言した。1 点目は、日本の学界における博士論文の位置づけが一時代前とは明らかに変化している現在の状況を踏まえた時、博士論文をその後に続く長い研究生活の始点に立つための論文と捉え、その中でなすことの上限を自ら明確に定めておく必要があるのではないかということである。2 つ目は、研究職に就く際に博士号を持っていることが「当然」となってしまう現在、博士論文の執筆を進めながら、その論文を単著として出版するための具体的な助成制度を見つけておくことで、次の段階(就職など)への移行がより円滑になり得るということである。